様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０４６８

研究課題名（和文）アイスランド語における動詞の自他交替の研究

研究課題名（英文）A study of transitive-intransitive alternations in Modern Icelandic

研究代表者
入江　浩司（IRIE, KOJI）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：４０３１３６２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、現代アイスランド語の自動詞と他動詞の交替を扱った研究である。主要なトピックとして、(1) 形態的関連のある自動詞・他動詞の交替パターン、(2) 接尾辞-stをもつ動詞の意味特性、(3) 衣類の着脱表現における自動詞構文と他動詞構文、(4) 天候の動詞に見られる自動詞構文と他動詞的構文、を取り上げ、記述的研究を行なった。(1) (2) は形態的関連のある動詞の自他交替に関する研究で、(3) (4) は特定の意味領域における自動詞構文と他動詞構文をめぐる研究である。

研究成果の概要（英文）：This is a descriptive study of transitive-intransitive alternations of the Modern Icelandic verbs. The following are the main topics dealt with: (1) morphological transitive-intransitive alternation patterns, (2) semantic properties of the verbs with the suffix -st, (3) transitive and intransitive constructions in the expressions of dressing and undressing, and (4) intransitive and transitive-like constructions with the meteorological verbs.

研究分野：人文学

キーワード：アイスランド語　自動詞　他動詞　自他交替　衣類の着脱表現　天候の動詞

１．研究開始当初の背景

本研究課題に関わる予備的な研究として、本課題の研究代表者が共同研究員として参加した平成 22～25 年度国立国語研究所共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」（研究代表者：パルデシ・プラシャント）における基礎作業において、アイスランド語を見出しとする中型辞書を基に、アイスランド語の自動詞・他動詞ペアのリストを作成した。形態論的な関連があるものと判断して抽出した約 350 個の動詞ペアのうち、約 80%が他動詞に何らかの接辞を付加することによって自動詞を派生させるパターンで、残り約 20%も自他同形もしくは派生の方向性が特定できないものであり、アイスランド語では他動詞を基に自動詞を派生させる傾向が極めて顕著であることが明らかとなった。

また、上記の作業より、他動詞から自動詞を派生させるパターンの中でも再帰代名詞由来の接尾辞-st を他動詞に付加して自動詞化するものが特に多いことがわかった。しかし、この再帰接辞をもつ動詞は、意味の面で再帰、相互、身体動作など、いわゆる中動相の領域に広く分布しており、他動詞の自動詞化以外では生産性がほとんどないことが先行研究より知られていた。

２．研究の目的

アイスランド語の動詞の再帰接尾辞-st には一般に生産性がなく、これを任意の動詞につけて新たな動詞を作り出すことはできない。しかし、いわゆる反使役の自動詞を形成する場合に限って、再帰接辞には生産性があるが、生産性の有無と動詞の意味等との関連は十分明らかでなく、本研究ではこの点を追究することを目的の一つとした。また、アイスランド語の形態的に対応する動詞の自他交替には、他動詞に再帰接辞を付加することの他にもいくつかのパターンがあり、本研究ではその全体的な様相を明らかにすることも目的とした。

また、形態的な自動詞・他動詞の対応関係とは別に、他動詞に基づく表現と自動詞に基づく表現が共存する意味領域として、特に衣類の着脱表現を取り上げ、表現の類型という観点から同一の意味領域における他動詞ベースの表現と自動詞ベースの表現の対応関係を整理して記述することを目指した。

さらに、特殊な非人称構文をとる天候の動詞の項の現れ方において、一般の他動詞・自動詞構文と平行性の見られる現象について明らかにすることも本研究で追究する課題の一つとした。

３．研究の方法

本研究の遂行において、言語データの収集に最も時間をかけたが、それには(a)文献資料に基づく用例収集、(b)アイスランド語話者の協力による現地調査による言語データ収集、の二つの方法を併せて用いた。

(a)の文献資料に基づくデータ収集では、主として文学作品等の一次文献を丹念に読みながらの用例収集と、Web で公開されている新聞記事を利用して作成したコーパスを用いた用例収集を行なった。

(b)については、2013 年度から 2015 年度にかけて、アイスランド本国における現地調査を各年度それぞれ 2 週間程度行ない、母語話者からの聞き取りにより、一次文献から得られたデータの文法性のチェックや話し言葉を主体とするデータ収集を行なった。

データの分析においては、言語類型論の立場で行なわれている一般言語学的研究を主として参考にし、アイスランド語の記述的な研究を進めることに努めた。

４．研究成果

本研究の成果のうち、まず形態的関連のある自動詞・他動詞の交替パターンの概要を述べ(1)、次にその中でも他動詞から自動詞を形成する手段としては唯一生産的な接尾辞-st をもつ動詞の特性について述べる(2)。次いで、アイスランド語で他動詞ベースの表現と自動詞ベースの表現が交差する意味領域としての衣類の着脱表現について、類型論的観点から明らかにできたことを述べる(3)。最後に、特殊な非人称構文をとる天候の動詞について項の現れ方に着目し、指示対象のある項をとる自動詞・他動詞と並行的な構文をとることができることに関して明らかにできたことを述べる(4)。

(1) 形態的関連のある自動詞・他動詞の交替パターン

形態的関連のある自動詞・他動詞の対応では、次の(a-f)の 6 つが主要なパターンである。

(a) 自他同形（他動詞の被動者項の格形が保たれない）：sjóða「[対格] を煮る」/ sjóða「[主格] が煮える」、など。
(b) 自他同形（他動詞の被動者項の格形が保たれる）：fjölga「[与格] を増やす」/ fjölga「[与格] が増える」、など。
(c) 他動詞は弱変化動詞／自動詞は強変化動詞：leggja (過去形 lagði)「[対格] を横たえる」/ liggja (過去形 lá)「[主格] が横たわる」、など。
(d) 他動詞は接辞なし／自動詞は接尾辞-na：hita「[対格] を温める」/ hitna「[主格] が温まる」、など。
(e) 他動詞は接辞なし／自動詞は接尾辞-st：auka「[対格] を増やす」/ aukast「[主格] が増える」、týna「[与格] を失う」/ týnast「[主格] が失われる」、など。
(f) 他動詞は接尾辞-ja／自動詞は接尾辞-na：vekja「[対格] を目覚めさせる」/ vakna「[主格] が目覚める」、など。

Hólmarsson et al.(2009)の辞書を基にして収集した上記ペアーの総数は 345 であり、

その内訳は(a)19、(b)18、(c)12、(d)20、(e)254、(f)4、その他 18 であった。この数字からわかるように、(e)のパターンが圧倒的に多く、また現代アイスランド語で他動詞から自動詞を形成するのに生産的に使用されるのもこのパターンにほぼ限られる。

(2) 接尾辞-st をもつ動詞の特性

上に述べたように、接尾辞-st の付加は他動詞から自動詞を派生させる唯一生産的な手段であるが、接尾辞-st をもつ動詞の意味領域は広く、反使役的意味をもつ自動詞（上記(e)に相当）とみなせるものはその一部に過ぎず、それ以外の意味領域では接尾辞-st に生産性がそもそも見られない。また、接尾辞-st をもつ動詞が必ずしも自動詞であるわけではない。接尾辞-st をもつ動詞には、主として次のようなタイプのものがある（括弧内は派生元の動詞）。

(ア)身体動作を表すもの：klæðast「[主格] が衣服を着ている」(klæða「[対格(人)] を着せる」)、など。

(イ)相互関係を表すもの：slást「[主格] が喧嘩する」（slá「[対格] をたたく」)、など。

(ウ)可能受動を表すもの：fást「[主格] が得られる」（fá「[対格] を得る」)、など。

(エ)受動的意味をもつもの：geymast「[主格] が保存される」（geyma「[対格] を保存する」)、など。

(オ)目的語をとるもの：forðast「[対格] を避ける」（forða「[与格] を保護する」

(カ)対応する動詞が存在しないもの：ferðast「旅する」(cf. ferð「旅(名詞)」)、など。

このうち生産的な自他交替に主として関係する（エ）の受動的意味をもつものは、スウェーデン語など大陸側の北欧語では生産的な受動文の形成手段として発達しているのに対して、アイスランド語ではその段階に至っていない。＜vera（be 動詞相当）＋過去分詞＞で形成される生産的な受動文と（エ）のタイプの動詞による文の相違として、前者では同一の節中に＜前置詞 af＋与格＞句（英語 by 句に相当） によって外的な動作主を明示的に示すことができるのに対し、（エ）のタイプの動詞ではそれができないということがある。

アイスランド語では、接尾辞-st の添加によって形成される自動詞で、自然発生的な生起の考えにくい（外的動作主の想定できる）事態でも表すことが可能であるが、先行研究の Yamaguchi(2009)では、アイスランド語の自他交替を可能にする意味的条件として、状態変化と結果残存の解釈ができることが挙げられ、結果残存については話者の世界観や文脈情報によって成立が左右されることが指摘されている。また Yamaguchi(2009)では状態変化の自動詞の場合、非意図的ないし二次的な動作主が前置詞句＜hjá＋与格＞「～のところで」によって現れることがあると指摘されている。

本研究では、文学作品から採取した例に基づき、接尾辞-st による自動詞化によって、brennast「[主格] が火あぶりにされる」（＜brenna「[対格] を火あぶりにする」)、tunguskerast「[主格] が舌を切り取られる」（＜tunguskera「[対格] の舌を切り取る」）といった制度的な執行者が想定される事態では、執行権力（個人名などでは不可）などを＜前置詞 af＋与格＞句で加えることができる可能性を示した。

(3) 衣類の着脱表現

アイスランド語の衣類の着脱表現では、衣類を身につける主体が衣類に向かって（あるいは衣類を身につけた主体が衣類から離れて）移動するという捉え方に基づくものが多く、同じ着脱の動作を表すのに、自動詞をベースにした表現と、他動詞をベースにした再帰表現が共存している。

着脱の対象となる衣類は二つのグループに分類でき、(a)ジャケット、シャツ、ズボン、ソックス、靴といった比較的大きい衣類と履物を着脱する場合と、(b)帽子、ネクタイ、ベルト、手袋などの小物・アクセサリー類を着脱する場合とで、使われる表現が異なる。

このうち、(a)類の着衣表現としては、他動詞を用いるものとして、klæða「[対格(人)] を着せる」と再帰代名詞を組み合わせ、動作主体が自らを前置詞句＜í＋対格＞「～の中へ」で標示される衣類に向かって移動させる、という意味構造をとる表現がある。その一方で、他動詞 klæða「着せる」に接尾辞-st を付加して自動詞化した klæðast「着る」という動詞で表現することも可能である。さらに、fara「行く」という自動詞を用いて、前置詞句＜í＋対格＞「～の中へ」で標示される衣類に向かって動作主体が移動する、という意味構造をとる着衣の表現もあり、こちらの方が多用される。

(b)類の着衣表現では、setja「[対格] を置く」という他動詞と再帰代名詞を組み合わせ、主語となる動作主体が目的語としての衣類を自身の身体に向かって移動させる、という意味構造をとる表現が用いられ、こちらの類に関しては自動詞を用いる表現は存在しない。

脱衣の表現においても、上記(a)(b)の衣類の分類に対応して表現が分化しており、(a)の類で他動詞を用いるものとして、klæða「[対格(人)] を着せる」と再帰代名詞を組み合わせ、動作主体が自らを前置詞句＜úr＋与格＞「～の中から」で標示される衣類から離れて移動させる、という意味構造をとる表現がある。その一方で、他動詞 klæða「着せる」に接頭辞 af と接尾辞-st を付加して自動詞化した afklæðast「脱ぐ、脱いでいる」という動詞で表現することも可能である。さら

に、fara「行く」という自動詞を用いて、前置詞句＜úr＋与格＞「～の中から」で標示される衣類から離れて動作主体が移動する、という意味構造をとる脱衣の表現もあり、こちらの方が多用される。

(b)の類の脱衣表現についても、やはりsetja「[対格] を置く」という他動詞と再帰代名詞を組み合わせ、着衣表現とは逆方向の意味の前置詞句で衣類を表示することにより、主語となる動作主体が目的語としての衣類を自身の身体から離して移動させる、という意味構造をとる表現が用いられ、こちらの類に関しては自動詞を用いる表現は存在しない。

本研究では上述の衣類の着脱表現における他動詞ベースの表現と自動詞ベースの表現の対応関係を整理して示し、世界の言語における衣類の着脱表現の類型として、「動作主が衣類の中に（外に）移動する」という意味構造を一つのタイプとして立てることで先行研究(當野・呂 2003)の提案する言語類型論的観点を拡張することができることを指摘した。

(4) 天候の動詞

特殊な非人称構文をとる自動詞として天候表現に使用される一連の動詞がある（rigna「雨が降る」など)。この種の動詞は指示対象をもつ項をとらないことを特徴とし、平叙文を構成する際、文頭に副詞成分等がない場合、文頭に虚辞代名詞を置くが、この虚辞にþað(中性3人称単数代名詞)とhann（男性3人称単数代名詞）の二種類の可能性がある。この二種類の虚辞代名詞は文法的振る舞いが異なり、平叙文の文頭位置を副詞成分が占めたり、疑問文を形成する際に動詞が文頭に現れる際、虚辞のþaðは現れない（すなわち文頭以外では現れることができない）のに対し、虚辞のhannは文頭以外の位置でも保たれる、という違いがある。

ところで、アイスランド語の降雨の動詞のうち、rigna「雨が降る」とþruma「雷が鳴る」は、いわゆるthemeの意味役割をもつ与格項をとることができ、この点で同様の与格項をとる他動詞や自動詞と平行的であり、たとえばÞað rignir blóði「血の雨が降る」(字義通りの解釈「それが血を雨降らす」）という表現が可能である。言語類型論的立場から諸言語の天候表現を論じたEriksen et al. (2010)は、天候表現で虚辞代名詞を用いて動詞述語による表現を基本とする言語において、項をとる表現があるとすれば、それはほとんど比喩的表現に限られるということを指摘しており、この点はアイスランド語の降雨の動詞についても該当することが本研究で確認できた。

＜引用文献＞

① Eriksen, Pål Kristian; Seppo Kittilä, and Leena Kolehmainen (2010) The linguistics of weather: Cross-linguistic patterns of meteorological expressions. *Studies in Language* 34(3): 565-601.

② Hólmarsson, Sverrir; Christopher Sanders, and John Tucker (2009) *Íslensk-ensk orðabók / Concise Icelandic-English Dictionary,* 2nd ed. Reykjavík: Forlagið.

③ 當野能之・呂仁梅（2003)「着脱動詞の対照研究：日本語・中国語・英語・スウェーデン語・マラーティー語 の比較」，国際交流基金日本語国際センター（編)『世界の日本語教育：日本語教育論集』13, 127-141.

④ Yamaguchi, Toshiko (2009) The causative/inchoative alternation in Icelandic. In: Anju Saxena & Åke Viberg (eds.) *Multilingualism: Proceedings of the 23rd Scandinavian conference of linguistics.* Uppsala: Uppsala Universitet, 127-140.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 入江浩司,「現代アイスランド語の天候表現」,『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』第７号，査読無，2015年3月，pp.37-48.（http://hdl.handle.net/2297/41413)

② 入江浩司,「現代アイスランド語の動詞の自他交替の概要」,『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』第６号，査読無,2014年3月，pp.25-40.（http://hdl.handle.net/2297/36952)

〔学会発表〕（計１件）

① 入江浩司,「現代アイスランド語の動詞の自他交替の概要」，国立国語研究所共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」研究発表会，2013年7月27日，新潟大学（新潟県・新潟市).

〔図書〕（計１件）

① 入江浩司,「アイスランド語の衣類の着脱表現」，パルデシ・プラシャント、桐生和幸、ナロック・ハイコ（編)『有対動詞の通言語的研究―日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』，くろしお出版，査読有，2015年12月，pp.415-430.

〔その他〕

ホームページ等

① 入江浩司,「アイスランド語　使役交替動詞対リスト」，国立国語研究所「使役交替言語地図」，2014年6月. http://watp.n

injal.ac.jp/jp/downloads/Icelandic/.

６．研究組織

(1)研究代表者

入江　浩司（IRIE KOJI）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：40313621

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし